

アイルランド、伝説のセーター「アラン」

文・資料提供／野沢弥市朗



一番大きな島、イニシモアの遺跡ダン・アンガス。一説には海中に沈んだアトランティス大陸の境目とも言われる

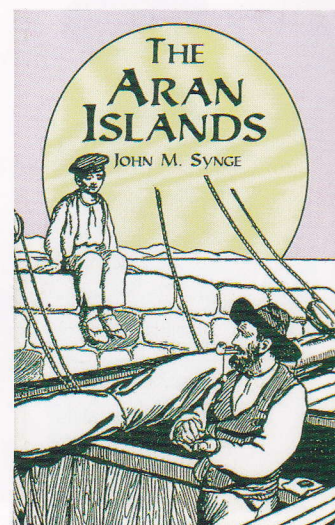
アイルランドは英国の西隣に位置する北海道ぐらいの大きさの島国です。英国の一部と捉えられがちですが、れっきとした独立国で、ケルト人の国です。ケルト人の発祥は青銅器時代のドイツで、かつてはヨーロッパ全土に住んでいたのですが、ゲルマン人、ローマ人、アングロサクソン人、と、次々に、西へ西へと追われていきました。西には不老不死の楽園があるという西方浄土の思想があったのです。アイルランドはヨーロッパの西の外れ。そしてアラン島はその更に西の果てにあります。そこから先は大西洋の大海原が広がるだけです。

これからアランセーターを編もうと志している方なら、アラン島がどこにあってどんな島なのか、は知っておいていいでしょう。

アイルランドの地図を拡げてアラン島を探してみてください。西岸の都市ガルウェイのちょっと沖に位置する小さな島、これがアラン島です。西からイニシモア、イニシマン、イニシア、と3つの島なので正確にはアラン諸島です。大西洋のはるか沖合に浮かぶような絶海の孤島を想像されたかもしれませんが、実は本土からわずかに10km程しか離れていません。離れている距離は少しですが、その環境は恐ろしいほどに本土とは違ういわゆる秘境であります。しかしセスナ機で飛べば飛行時間はたったの10分かそこら、なんとも「手頃な秘境」なのです。この手頃さから、近年は観光客が急増し、今やアラン諸島はアイルランドを代表する一大観光スポットとなっています。夏の船着き場は人で溢れています。しかし、もう一度アイルランドの地図を見てみてください。アイルランドの西岸には北から南までアラン諸島と同じような小さな島々がたくさん点在しているのです。その中で、アラン諸島は他の島々と一体何が違っていたのでしょうか。そして、なぜアランセーターはよその島ではなくアラン諸島から生まれたのでしょうか。

アランセーターの生まれ故郷 —アラン諸島

草木もろくに生えず作物を育てるのにも苦勞するような岩だらけの島、こんな島になぜ人が住み続けているのだらうとも思えるほど厳しい環境ですが、ここには景勝ダン・アンガスのような巨大な石造遺跡がいくつも残されています。このことから、紀元前2500年あたりにはすでにここに人が住んでいたことが分かります。アラン諸島の名物ともいえるあの延々と続く石積み風景は四千年以上にもわたって先人たちが作り続けてきたものなのです。



シングがアラン諸島での生活体験を元に著した紀行随筆『アラン島』

ロバート・フラハティ監督、映画『アラン』(1934年)



5世紀には聖エンダがキリスト教の布教にやってきて修道院を作り、そこに多くの修道士が修行にやってきたと伝えられています。16世紀には大西洋でスペインと覇権争いをしていた英国が多くの兵士を派遣し駐留させました。そして17世紀には流刑地になります。といっても島流しにされたのは極悪非道の犯罪者などではありません。清教徒革命で英国の頂点に立ったクロムウェルの軍隊は、1649年からアイルランド全土でカトリック追放のための残虐行為を繰り返し、これによって捕らえられたカトリックの僧侶やアイルランドの兵士たちがアラン諸島に島流しにされたのです。どれもみなアラン諸島が「手頃な」離島であったことが要因となっていることが分かります。現在アラン諸島に住んでいる人たちの祖先はこのような人たちなのです。

野沢弥市朗(のざわやいちろう)

1957年生まれ、神奈川県藤沢市出身。静岡市にて「英国気質の洋服屋・セヴィルロウ倶楽部」を経営する。アランセーターへの造詣が深く、著書に『アイルランド／アランセーターの伝説』（織研新聞社）がある。（株）ジャック野澤屋代表取締役。

<http://www.savilerowclub.com>



随筆「アラン島」

しかしなんと言ってもアラン諸島を世界に知らしめた最初の契機は、1907年に出版されたシングの紀行随筆「アラン島(The Aran Islands)」であります。当時若干27歳であったシングは、4年の間、夏と秋にはアラン諸島に滞在し、冬にはパリに住むという生活を繰り返し(これこそいかにも「手頃な秘境」ならではのスタイルですが)島の人々の暮らしに密着取材を重ねました。ヨーロッパはもちろんアイルランド国内ですら消え失せていたような古いケルトの習慣やアラン諸島だけに独自に生まれた風習などを、シングは決して上から目線になることなく、敬意と愛情を持って丁寧に描いたのです。普段見慣れた欧州の地図の西の隅にいまだに古代ケルト社会の生活を引き継ぐミステリアスな島があるとは、と、当時の文学界には驚きの声が上がりました。

見渡す限り石垣が続くアラン諸島の風景。夏場はアイルランドの大観光スポット

映画「アラン」

こうして、アラン諸島はなんだか他とは違う特別な島らしい、というイメージが出来上がっていったのです。そしてシングの言葉はやがて映像で表現されていきます。「ナショナル・ジオグラフィック」というアメリカの地理の雑誌をご存知だと思いますが、そのナショジオは1931年6月の第59号で28ページにわたり34枚の写真でアラン諸島の大特集を組みました。そのナショジオの特集とシングの随筆を穴の開くほど読み込んで頭の中に焼き付けた映画監督がロバート・フラハティでした。そして約2年間アラン諸島を行き来して撮影されたのが1934年公開の映画「アラン(原題はMan of Aran=アランの男)」です。

岩を砕き海藻を運んで畑を作る重労働やカラハと呼ばれる小舟を操り、荒れ狂う海でのサメとの大格闘など、モノクロの映像はアランの厳しい生活を映し出していきます。この映画は今でもビジターセンターで夏の間毎晩のように上映されていて、島の人たちは単に「ザ・フィルム」と誇らしげに呼んでいます。

1910年にイニシモアで撮影された写真。当時普及し始めた小さなジグザグとケーブルのガンジーセーターを着用(National Museum of Ireland 提供)





ボストン帰りの天才ニッター、マーガレット・ディレイン。ガンジーセーターを進化させてアランセーターを編みだした

アランセーターを世に知らしめた女性たち

この「不思議の島」アランで、アランセーターは編み出されました。どのように生まれ普及したのか、ここでは5人の女性にスポットを当てることで、その疑問に答えていくことにしましょう。

アランセーターの始祖

マーガレット・ディレイン (Margaret Durrane 1877-1965)

彼女こそ、初めてアランセーターを編んだ人、と言っていいでしょう。アラン諸島イニシモアの西端の村に生まれた彼女ですが、19歳の時にアメリカのボストンに渡ります。当時アイルランド西部ではアメリカの白人家庭のメイドなどに女中奉公に出る若い女性は大変多く、彼女もまたその一人であったのです。特にボストンのあるマサチューセッツ州へは多くのアイルランド人が移り住んでいました。編み物好きだった彼女は、仕事の合間に編み物の店などを回り、中央ヨーロッパや北欧から来た移民からもケーブル、モス、トレリス、ハニカムなどなどの伝統的な柄を意欲的に習得していったのです。そしていつしか彼女の編み物のテクニックはまるでキャンバスに絵を描くように自由に柄を編み出せるほどに秀でていったのです。

7年の奉公を終え、彼女は1903年に26歳で島に帰ってきます。当時のアラン・イニシモアには殖産興業のための漁業基地が作られ、そこにはスコットランドからやって来た漁師たちの家族が多く出入りしていました。当時の海の男のセーターといえばガンジーセーターです。紺色の編み地で肩や胸に裏編みの縄目模様が入ったセーターで、その名の通り英仏海峡のガンジー島で19世紀に発祥したのですが、徐々に英国の漁師たちの間で広まり、英国やアイルランド沿岸部の各地に普及していました。他の港町と同様にアラン諸島にもそのガンジーセーターが伝えられ、島中に広まりつつあったのです。

そんなところに天才ニッターが帰ってきたのです。平凡なガンジーセーターも彼女の手には掛かれば凸凹の豪華な柄入りセーターに昇華します。もともと手先が大変起用だった島の女性たちでしたから、皆が彼女をお手本にし、この島のセーターにはどんどんと派手な柄が編み込まれていったのです。こうして1920年頃にはアランセーターが誕生していたものと思われます。アラン

セーターの始祖となったマーガレット・ディレインはその後も素晴らしいセーターを編み続け、60歳を過ぎたときにコンテストのために編んだ最高傑作の一枚は現在もアイルランド国立博物館に所蔵されています。



1950年代初頭の堅信礼の集合写真。男の子はみんな白いアランセーターで臨んだ

1946年のコンテストで優勝したマーガレット・ディレインの作品。渾身の思いがこもった傑作 (National Museum of Ireland 提供)



白いセーターを世界へ

ミュリエル・ゲイン (Muriel Gahan 1897-1995)

アランセーターを始めとして、アイルランドのカントリーサイドに生き続けている機織りやカゴ細工など、女性たちの手仕事を保存していくことに貢献した人物として知られているのがミュリエル・ゲインです。彼女がいなければ、今日のようなアイルランドのクラフトワークの隆盛はありえなかったでしょう。

1930年の冬、彼女は国内のクラフトを集大成した「カントリー・ショップ」を首都ダブリンに開店しました。そしてその翌年1931年の夏、店に並べるクラフト収集のため初めてアランにやってきました。当時はマーガレット・ディレインが島に戻ってすでに約30年が経っていて、島で編まれるセーターはかなり豪華な柄が入っていたはずですが、しかし男たちが着るセーターの色は相変わらず紺色だったので、一見すると少し柄に凝ったガンジーセーター程度にしか評価されていなかったのです。アランの家庭を回っていたゲインは片隅に置いてある子供用の白いセーターに目がいきます。12歳の男児が教会の堅信礼で着る晴れ着とし

アランセーターの芸術的価値を高く評価した女性活動家ミュリエル・ゲイン。96歳の誕生日にて



て母親が編んだものでした。子供用の白いセーターを大人サイズで編む、という、このまにコロンブスの卵的なアイデアは、作業着としてのセーターという殻から出て、店で売するための商品という目的があって初めて沸いた考えだったのです。

白いアランセーターはダブリンのカントリー・ショップに並べられました。その一枚はロンドンの手芸評論家によって買われ、やがて英国内に紹介されることにつながります。

1940年代に入り、アランセーターの販売量が増えるにつれて、島の編み手の中に質より量を求める風潮が起き始めました。セーターのレベルダウンを懸念したゲインはこのとき「アランセーター・コンテスト」を実施しました。1946年、アランの3つの島に呼び掛けられエントリーは50枚を超えました。賞金の掛かったコンテストですから、編み手たちは持てるスキルを惜しみなく注ぎ込み、それはそれは素晴らしいセーターが集まりました。その時の優秀作数枚は長くカントリー・ショップに展示され、1978年に同店閉店後にアイルランド国立博物館に寄贈されました。前項で紹介したマーガレット・ディレインの最高傑作というのはこのコンテストの優勝作品なのです。

ミュリエル・ゲインはその後もクラフトの普及や女性の地位向上に貢献し、1985年にはその功績を讃えたミュレイル・ゲイン博物館がダンドーク郊外に開館しています。アランセーターを最初に世に知らしめた立役者です。

ハンドニットをファッションに

キティ・ジョイス (Kitty Joyce 1930--)

1940年代からダブリンの中心街にある小さな専門店クレオ。カントリー・ショップとクレオは、1950-60年代に掛けて、ダブリンのアイリッシュ・クラフト・ショップの双壁と言われていました。1978年にカントリー・ショップが閉店してからもクレオはずっと素晴らしいクラフトの数々を扱い続けています。この店を母キャサリン・ライアンから引き継いだ二代目オーナーがキティ・ジョイスです。彼女の元には、アランセーターを始めとして、アイルランド中から珠玉のクラフトが磁石にすい寄せられるように集まり、クレオはまるで玉手箱のような楽しい店になっていきました。

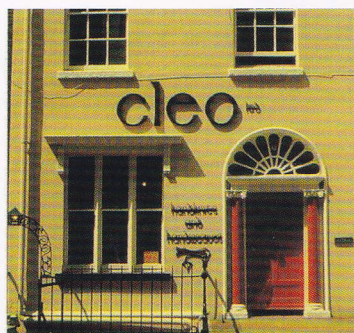
コンテストが実施された頃のアランセーターは今とは比較にならないほどに技巧に凝っていました。まるで彫刻のように柄を編み込むことに力が注がれていたのです。しかし、1950年代に入り、アランセーターの知名度が上がるにつれて、編み方も徐々に効率化を求められるようになってきたのです。クラフトが産業化する過程ではある程度は致し方ないことではあったのですが、この傾向に拍車を掛けたのが、政府の対米輸出振興策でした。ニットは外貨獲得のための重要項目であり、手編みだけでなく機械編みのセーターもどんどんとアメリカに輸出されました。

そんな政府の方針に同調することなく、1940年代の一番すごかった頃のアランセーターの素晴らしさを後世に伝えようとしたのがキティでした。マーガレット・ディレインなどアラン諸島の編み手の他にもアイルランド国内の優れたニッターたちと手を組み、ハンドニットの品揃えを進めました。編み柄に凝っていっただけでなく、色合い

をカラフルにしたり、着丈を長くチュニック調にシルエットを変えたり、またはうんと短くしたり、あるいは素材自体をカシミアやアルパカに変えてみたりと、ファッションとして通用するハンドニットに昇華させていったのです。男性サイズだけでなく、女性向けや子供用も用意していきました。

キティの手掛けるセーターは、当然かなりいい値段にはなりましたが、1950年代にはクリスチャン・ディオールを始めとするパリのデザイナーやジャーナリスト、そしてケイリー・グラントなどのハリウッドスターなどからも買い求め

ダブリン・キルデア・ストリートの「クレオ」



「クレオ」の二代目オーナー、キティ・ジョイス





モーリンのセーターを受け取る
ヨハネ・パウロ二世

られることが多く、また1990年代にはブルーミングデールやサックスといったニューヨークの
名店に独特の見事なハンドニットを提供したのです。

2012年にキティは娘のサラを3代目にして引退しましたが、クレオの店は今もダブリンの中
心地で現代への対応を模索しながら輝き続けています。

アランセーターは神様の贈り物

モーリン・ニ・ドゥンネル

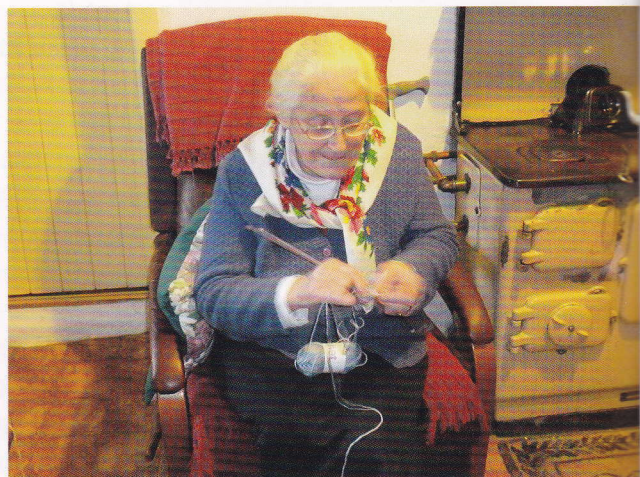
(Mairin Ni Dhomhnaill 1934--)

もし2000年頃にもう一度アランセーター・コンテストをやっていたとしたら、そしてもし私が
審査員ならば、きっとこうなっただけです。第三位がイニシニアのブリッド・イ・コンニーレ。準
優勝はイニシモアのメアリー・オフラハティ。そして優勝は間違いなくイニシマンのモーリン・ニ・
ドゥンネルでしょう。彼女ほどその一生がアランセーターと深く関わっている女性はいないでしょ
う。彼女のあらましは今までも様々なメディアで充分に紹介されていますが、それでもなおこ
こで彼女を取り上げないわけにはいきません。

1960年代から80年代に掛けてアランセーターをアメリカや日本に普及させた男が元弁護
士のパドレイグ・オショコンでした。その彼のためのセーターを供給する現地のまとめ役として、
22歳の時から40年にわたって、30人ほどの編み手を束ねて糸の分配や納期の管理、仕上
り品のチェックなどの実務を担っていたのがモーリンだったのです。もちろん自らも毎日毎日セ
ーターを編みながらまとめ役の仕事もこなす、それは幼くし
て両親を亡くし、兄と二人で貧しい暮らしをしていた彼女の
生計を支える糧であったのです。

初めて編んだアランセーターは10歳の時、前年に亡
くなった母親に代わって兄の堅信礼のために編んだ白い
セーターでした。以来何百枚のアランセーターを編んだ
ことでしょう。そして1981年、思いがけない依頼を受け
ます。「このたびゴルウェイを訪問されるローマ法王にア
ランセーターを献上することになったので、あなたに特別
な一枚を編んでもらいたい」。カトリックでは法王はキリ
ストの代理人です。モーリンのセーターは神の元にまで
届いたのです。

筆者は彼女とこの20年で3回会っています。一体何
時間ぐらい話をしたのでしょうか。手先だけは目にも止ま
らぬ早さで常に編み棒を操りながら、静かな表情で穏や
かにゆっくりと話します。その言葉のひとつひとつが示唆に富むものでした。「何も急いで編ん



イニシマンの伝説のニッター、モーリン・ニ・ドゥンネル

「次世代へハンドニットの価値を
伝えたい」と語るアン・オモーリャ



でいるのではなく、何十年も編んでいるうちに自然にこのスピードになっていったので
す。これがいちばん心の休まる私のスピードなのです。そしていつもどんな柄を組み
合わせようか新しいアイデアはないだろうかと頭を巡らせています。私は編んでいる
ときがいちばんリラックスできるのです。でも、この技術は私のものではなく、神様
が私に与えて下さったもの。アランセーターは神様の贈り物なのです」

アランセーターの守護神

アン・オモーリャ (Anne O'Maille 1951--)

1938年、アラン諸島の対岸・ゴルウェイの町で仕立屋を開業したばかりのパドレ
イグ・オモーリャは、ある土曜の朝、教会前の露天市で寒空に震えながらアランセ
ーターを売りにやってきている島の女性たちを見かけ、そのセーターやソックスを買い
求めました。それ以来、彼は、島の編み手に毛糸を送り編んだセーター買う、という
関係を作り、アランセーターを仕入れることになりました。この店は、その後後継者

港町ゴルウェイの老舗クラフトショップ「オモーリヤ」



難からいっとき廃業寸前となりましたが、彼の甥の嫁であるアン・オモーリヤによって再興され、77年に繁華街に店を移しました。紳士服の仕立ては大幅に縮小し、代わりにセーターやツイードなどアイルランド製品を販売する、ツーリスト対象の店に業態変換し、店名も単に「オモーリヤ」となりました。店内には壁面にセーターが積み上げられ、柱回りには古い写真や新聞記事が提示されています。周辺には粗悪品を売りつける土産物屋も多い中、この店の評判を聞き付けた観光客がひっきりなしに訪れ、特に夏の店内はいつもごった返しています。

現在オモーリヤと契約している編み手は数十人に及びます。アラン諸島の人も数人いますが、メイヨーやコネマラなどアイルランド北西部の住人が中心です。アンはただ店にいただけではなく、ニットスクールの講師をかって出たり、編み物ツアーのコーディネーターなどもこなし、また、アメリカで開催されるクラフトフェアなどにも積極的に参加を試みています。このような彼女の活動は「アランセーターの守護神」とか「古いハンドクラフトの新しい旗手」などとアイルランドやアメリカのマスコミから多くの取材を受けています。こう書くと、いかにもやり手の女性店主、という印象を与えるかもしれませんが、実際の彼女にはビジネスライクな態度はみじんも感じられず、クオリティの高いハンドニットをITの発達した現代の情報社会の中でどのように知らしめて、かつレベルの維持を保っていくか、それを実現することがニッターたち女性クラフトワーカーの幸福につながるのだらう、と心に決めているような信念を感じます。

静岡市にある筆者の店では、オモーリヤと特別な関係を築いていて、日本のマーケットにあったアランセーターを毎年数十枚供給してもらっています。ハイレベルのアランセーターはもちろん多少高価ではありますが、多くのお客様に喜んでいただいています。

本物のアランセーターとは何ですか、とは、時々尋ねられる質問です。しかしこの質問は意味の薄いものになりつつあります。あえてその質問に厳密に答えるとするなら、「アランセーター・コンテスト」に寄せられたような1950年代まで島で編まれていた技巧的なセーター、であると言うほかありません。それ以降、産業化商品化する過程で芸術性が薄まっていったことは致し方ないことです。どんなクラフトにもそれは否めません。しかしそれはアランセーターの価値を損ねるものではなく、むしろ白という色を得たことを含め、産業化商品化することに成功したからこそ、アランセーターは21世紀の現代まで生き残ってきたのだと言えます。

アランセーター、それは荒海に漁に出る男のためにひと針ひと針心を込めて女が編んだ、フィッシャーマンセーター。良くいわれるコピーです。しかし、見てきたとおり、実は白いアランセーターはフィッシャーマンセーターではなかったのです。私は今までに何十人もの編み手に会ってきて、何のために編むのですか、と聞いてきました。はっきりとお金のため、といった人もいました。でも多くの編み手に共通するのはモーリン・ニ・ダウンネルと同じ感情です。「編んでいると心が落ち着いてくるから」「誰のためでもなく、自分の安心のため」現代のハンドニッティングにとってこの動機は何より大切です。震災後の気仙沼で手編みのアランセーターのプロジェクトが興ったのもこの手編みの持つ心の癒しの効能が感じられたからに他なりません。

アランセーターの持つ由緒や歴史をリスペクトしながら、自分の心の平安のために編むハンドニット。そう、これからあなたの編むアランセーターこそがあなただけの本物のアランセーターになるのです。

イニシモア島の玄関口、キルローナン港。クラフトショップやカフェ、土産物屋が迎えてくれる

